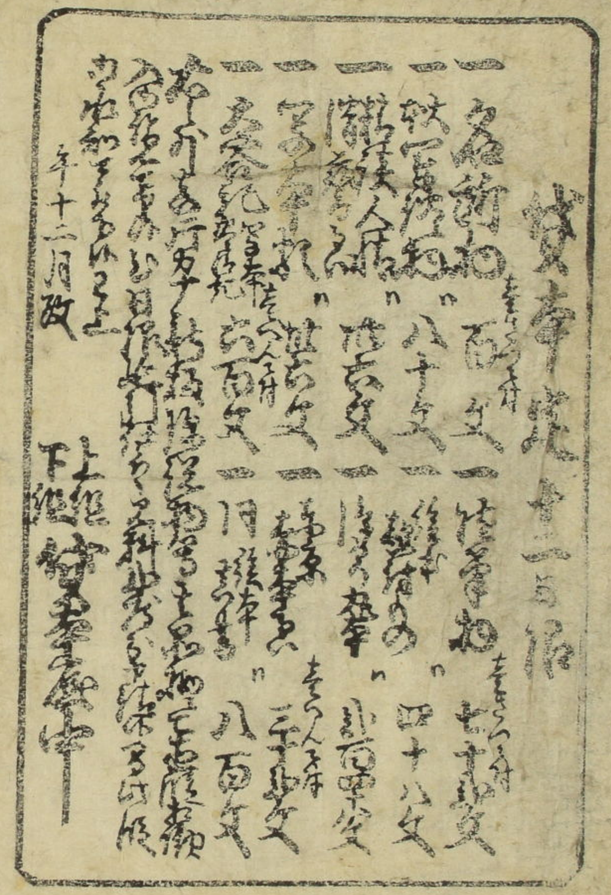
釋迦御代記目録

二

へ13
4037
2



釋迦御一代圖會卷之二

目録

著闍診脉摩耶勸墮胎藥
老翁相摩耶説胎内皇子高德
相者們討論摩耶夫人容體圖
摩耶夫人夢裡聽十恩説
盤毘尼園催花宣
悉達太子降誕現天地瑞異 同圖
摩耶夫人逝去
悉達太子入學阿私陀仙示三十二相

01 42 8655

門へ13
4037
2

悉達太子与提婆挿藝
悉達太子与諸童子挿射術圖
提婆与摩陀角觝圖
淨居佛一試悉達太子
提婆太子擊大象圖
淨居佛二試悉達太子
悉達太子娶耶愉陀羅女
悉達太子与達婆太子鬪馬術圖

釋迦御一代圖會卷之二

浪華　好芝堂野亭考選

著閣診脉摩耶勸墮胎藥

淨飯王八摩耶夫人懷妊有しより皇子の誕生を待ること一日三秋の思をなし
ゐ已ゐ三年を往ども降誕の沙汰なくして酷く睿慮を煩せゐ。群臣を衆
て紛議あり四支如何あらんと問ゐ三太臣ゐ月卿雲客冠を傾け看と疾
しゐ。議論區々ゐ古今の例を考ゐ胎孕三年ゐおよび先蹤を尋ざれど
是ハ疑らくハ病痾の所為なるべしと衆議一致。其旨啓奏しれば淨飯王も
始正しく夢の告ハふむりゐひゐ。疑心暗鬼を生じるなり。諸臣の幻ゐ御心迷ひ
歩てぐ四天下ゐ名を得し典藥官を召寄病根を推究めしゐ速ゐ治ゐ良劑と
調じ夫人ゐ勧まゐと勅捷ある是ゐ依く遍く百國ゐ觸渡し。摩耶夫人の病源
を脉察ゐ良医を尋ぬ茲ゐ子淨國の医官ゐ著閣と云る者あり。幼ゐより
医術を好ゐ普く名医ゐ従ひ学ぶ四百四病の治法知ざる事なく死を起し生ず

四その妙術ありて一度脉を診て其病根を察せずとも更なり鈔いも財宝を貧
るの二僻あり一ぞ浄飯王の医耆婆召て夷狄ゑ大いに怡び吾迦毘羅城に至
く摩耶夫人の患病を療じ莫大の恩賞を得んと募り憔悴して摩伽陀
國へ上りぬ憍曇彌夫人の附人馬将軍八旧織なれど先月景城へ至り馬将軍
に對面して召に憔悴して上り旨を告ぬるぞ馬将軍暗に悦び人を拂ひ著闍に
謂て曰摩耶夫人実に妊娠なれども出産遅々に堪ぶ故りも患病の所為
なるべく諸國の名醫と召る所なれども卿に勝る者ハあらじ何乎夫人を診
脉せば妊娠の吏を抑隠し患病なりと告ん容に墮胎の薬を勧め胎子と血
水とを得させよ然ぞ恩賞ぞに任ぜんと頼ぞ素り貪慾の著闍
なれば一織の恥ぞ是を肯ひ別を告く朝廷へ出るに早諸列より召に憔
じく上り聚る医官百人紆相結居り星光臣諸医官を廳中に烈坐させて
なるべく医術の理を討論せしに其能不能を試しに維有て著闍が右に

出る者あれば星光臣諸ハ著闍と天下の良医なりと。其旨奏聞と浄飯王
申ひ然て耶が容躰を窺ひ。胎子に患病多く看定に若懐妊ぞ安
産ぞ元良薬を勧め。亦病痾なれば速に平愈ぞ元方を配剤せと倫言
ある。著闍敬て勅命を奉り心裡に仕ぞ怡び青陽城に至て烏将軍
に面謁して王命のありぬを述べ烏将軍も夫人の懐妊是に非ぞ弁じる
る折なれば甚ぞ怡び労を謝して懇ぞ諸夫人に見へ王命のありぬを告る。夫
人驚ぬ胸中に想ひ。遥に夜正に夢想の告ぞ有る上に妊娠なる吏疑
るべくもあらず。陪産の婦吏ハ渠道師が咒詛の所為に心長く降延の期を待
よと示しぬ。但令勅命なれば良医薬を服し若胎内の皇子に過ち有
ば悔も及ばず。是ハ如何とぞ。身独胸を痛ひ怪と思へ烏将軍に向く。
耶が妊娠尋常に易り。已に三年経ぬれども降延あるべく帝釈ぞ雖々に患病
のぞと思ひハ理なれども。耶ハ皇子を孕ぞと決定に知しに今吏医師

に委ねてれにあらむど卿おもふべく回奏して医師を申しれへと仰ければ烏将軍推挙し御中
なる事なれバいとも渠著闇が貴ハ御懐妊なるぞ速に御平産あるべし良薬を勧め若患
病ならバ頓て御平愈有べきの医療をなしなまんとの事なれバ一度診脈を乞ひ其
医案然ありて其上御意に合ハざれバ調薬を服用しあるまじ。何が中ゆ勅命然奉り
て参らりし者を空しく申おかんぞ。違勅の恐れあれバとと諫るにより夫人巳事を得
ざることは左も右もと縦ふて烏将軍頓て著闇を夫入の座前へ招き精く脈察を
まゐらせよと命ぜらるに著闇畏り敬で夫人に咫尺し容躰を窺ひ診脈とるに正に胎妊
ならで違ふべけれども馬将軍が約と云ひ是を患病と云ひ墮胎せしむる時ハ朝廷の恩賞と
馬将軍が賞禄と両ながら是を得て一時に富貴を極めんと肚裡に思惟し。佯と眉を
顰め恐ある事ながら夫人の御胎内懐妊に似て懐妊ならず。是悪血凝結て血塊
となり累年に増長して今ハ已に胎孕の如く。是皓ぎ難治の症なりされども吾が家に
希代の良方あれバ調剤して奉る。一七日が間怠らず服用し給ハゞ不日に御平愈

なし玉ひなんと釣巧にぞ申ける。夫人聞召して又一層の憂を増心裡に思ふやう此者の医
道に精からねど。聡が懐妊を察せずして。患病とのみ医案甚ぞ中らず。若渠が調薬を
服せバ胎内の皇子を害ぜし。然ばとて王命に依て来る典薬の薬を服せじと云バ
違勅の咎をかうむり免れ是ハ何しよふべきと思ひ猶豫沈吟して坐しけるを烏将軍早く
其色を悟りあらず。著闇に向ひ。良医已に診脈して病の所為と申さるゝ上ハ宜しく之を下
しなべ。吾時を移さず是を進ぜんと云ならバ著闇頷掌して墮薬を調合し。偖烏将
軍に謂て曰今日殿中において諸道より召に應じて参り聚りたる医官们と医道の論
與を討論する所に悉く庸医にして医の秘決を知者なし。敢て五臣が此調薬を見せまじ
き事勿き。見せなバ己が知ざる事を推裏調薬の可否を論じ。自然夫人の疑念を
引出し。徹底もべき良剤も却て効を奏する事なかるべし。纔もしらぬ是墮胎の
毒薬なる事を手までとの巧なり烏将軍是を史て半信半疑ながらも心に想
旨ある故に佯と承引せし体にて著闇を帰し。其后平日に勤仕する典医を招寄て

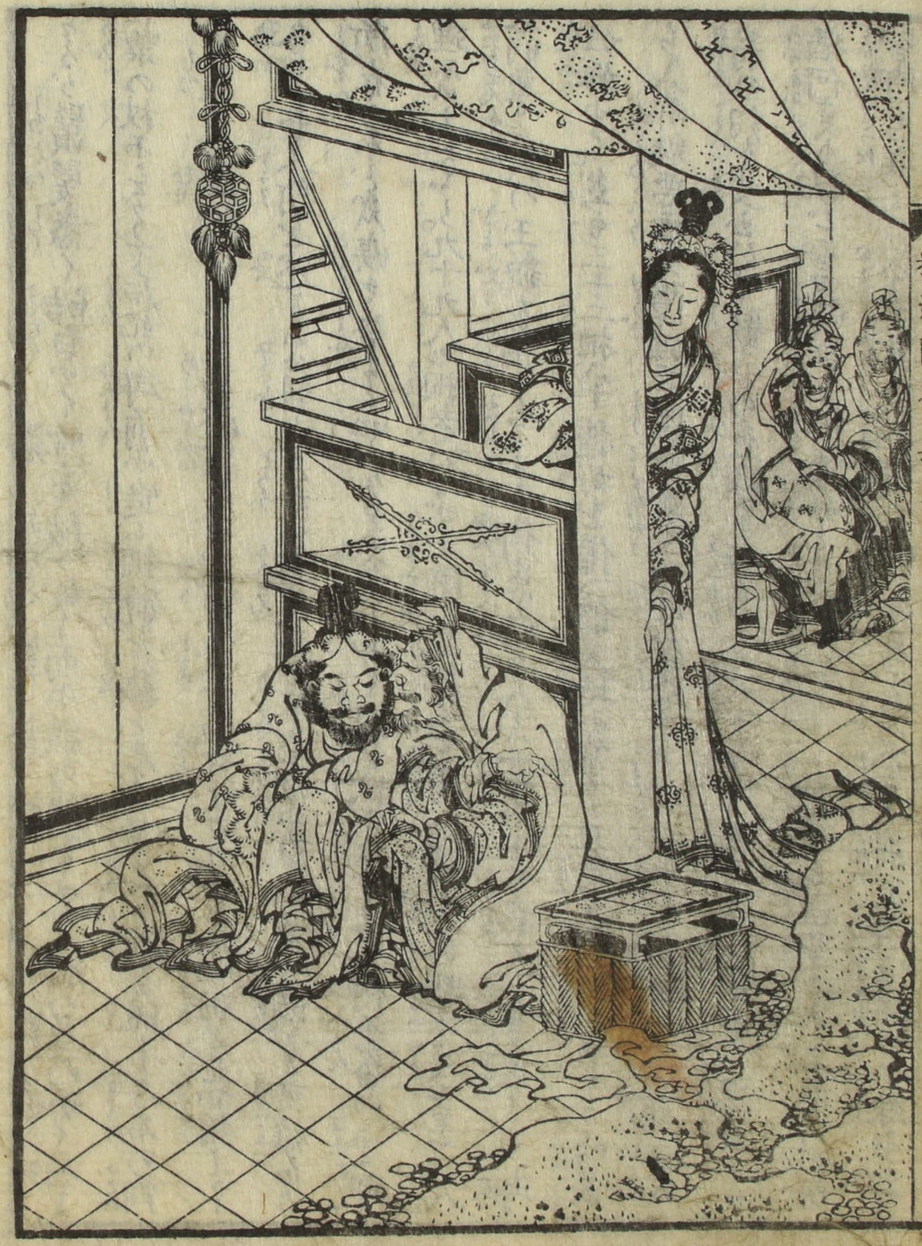
著閣ゞ調藥を鑒行せしむるに此輩も著閣ゞ大名に此怕せと其藥法是何ゝ主剣
る解せざれども著閣ゞ合方ゝれで定ゝく深ゝ医案なくゝと臆断し実も后妃の御容
躰小宮も妊娠と思なるゝど血塊と見し八草見ゝく此藥法最も為るゝいんとかおち
烏將軍の此者の杜撰と生ゝゝと偖公著閣ゞ医案必的せると心を安んじ夫人に其由を
言上し服用しむ久支を勧む夫人を初より服藥をゞ意なれども唯淨飯王の睿慮
を安んせん為ゝゝに脈察を行せしに渠已に懐妊のあるゝとゝを以く此者の調藥服
すべゝゝと心に忌藥湯を用る躰をし晴に後園に捨させ更に依著閣ゞ巧針も
画餅となり落胎の汝汝もなく増て降延の気八猶なゝゝゝ彼藥湯を日々に
後園に捨らゝ其余流園中にながれ入植なるべる草花是ゞ為に枯萎ゝで怕れ
婦女も初りゝど心著ゞゝゝ果八覚り夫人に斯と告るに后妃殺れむひきれでを初
より妊しと思し支よゝて愈身を慎を他の医官ゝ調ゞ藥ゝとも敢て用ひむゝど
ゝく流まゞ捨させられる

老翁捫夫人奏胎中皇子高德

朝廷に日々に戸耶夫人の容躰を紡せ更に支もなく病も愈ゞを降延も
なれど淨飯王睿慮を悩ませむひ亦群臣を召聚く詮議あり已に医藥効を奏
せざる上八百針盡ゝり此上八四天下に觸ゝして観相に堪能なる者を撰出し夫金相
させの患病ゝ妊娠ゝ定ゝゝと宣旨ある諸大臣王命を畏り諸國に紀命を傳へく
相者を召ゝに看相に名を得し輩年来の琢磨を顕ゝを八此時なりと我もくと召に
應じ迦毘羅城に参り集る者已に百余人なれども諸相者を召ゝ侍臣を以く紀あり給ゝ
精く看相せよ能見究ゝゝん者に八君王の莊園に下し与ゝしの御支ゝゝ相者一奇
に拜伏し王命を領掌して官使と俱に青陽城の宮中に至る官使八烏將軍に對面し
云々の旨通達しれで烏將軍後宮に入く夫人に斯と言上する后妃亦憂ひ船と
深閨に引籠り年々に沐浴せざと流ゝを然るに尋くの相者に見人支をたまゝ

此吏のミハ勅行を願いと辞ゐ烏将軍ゟて仰さる吏ゐいへども大王御身の上を案し
煩ゑ玉ひ或ハ高徳の験者ゐ祈禱さゑ或ハ諸國ゐ名医を需ゟ今亦天下ゐ名ざる
相者を召聚ゐ扁ゐ御身を愛幸しゐ帝恩ゟり然るを辞ゐ勅ハ違勅の科
を免ま玉ハど。何吏ゐ君の御為御身の為と思召相者ゐ見へ玉へと夫婦言ゑ重て
練ゟゐ。后妃已吏を得ど。然ゟ〳〵王殿ゐ立出帳を垂く相者を一人ゟ〳〵呂入
て観相さゑ玉ふ是ゐ依て百人の相者ゟえゟ〳〵后妃の御前ゐ出く。其王貌を相しを
ゟゐ天の与ゑる美人ゐ〳〵久〳〵御悩ゐ稍面痩玉へども素雪の肌あざやゐ桃李の面
麗こと譬ゐ物なく。后妃の顔ゐ向ゟ〳〵の者其國色ゐ眼を奪ゑ恍惚ゟ〳〵醉る
ゟ如く痴ゟるゟ如く吏ゐ懐妊ゟ病病ゟ見ゑゟるゟ思返〳〵熟看相し。烏将軍
ゐ對し后妃を相しゟるゐ妊娠の表いなど御腹の脹大なるハ必定疾病の所為
ゆくいなどしと告始一人より九十九人まで大同小異ゟあ玉ども皆妊娠ゐあらど
是血病なり。但し妖邪の障碍ありなんど云ゟゐ。唯百人目ゐ一人ゟ老翁あり

そゟゟ髭鬚悉く皓白ゐく雪を被ゟ如く面ゐ皺の波をゟゝ腰ハ弓ゟ如く屈
藜の杖ゐもたゟて后妃の御前ゐ進ゝ相貌を熟と尽く。潸然と泪を流し左右の人
ゟ畏せざど咤び入ゟさど烏将軍大ゐ紆り咎て曰先より九十九人ゟ相者看相しく
各其ゟり所を述ゟゐ翁一人左右の者文紙ゟ告ざ泪ゐのゝむせぶハ頗ゟ奇姫ゟり
所存のゐと或疾々告よと叱ゟゐ翁よゐ〳〵泪を拭て云ゟゐ。御不審の旨御
理ゐい去ゟゐ。九十九人の相者いまざ王渕を窺ゟざ焉ゟ蠑竜の蟠ゟる吏をゟゝん
翁尊夫人ゟ王貌を相しゟるゐ御患病なんどハ露ゟども在さど是正しく御
妊娠ゐく。然ゟ三十二相八千種好を備へ徳天地ゐ等し紀皇太子ゟ在せり唯恨
らくハ邪魅悪霊の障碍ゐ依御縦生の遅延吏ゟゐ。亦雨そゝぐ温ゟゐ郎夫人
翁の紅を変玉ひく歓喜の色顕ゟ此翁ゟて天下ゟ博識よゟ最嬉しく思召ゟる
猶何吏ゐ曰ゟど。烏将軍ゐ御懐妊と申て心男ゟゟ亦難して曰是まざ名誉の医
皆御患病ゟ〳〵今亦爰くの相者ゐ病の所為と考ハ告ゐ翁一人御懐妊と申殊ゐ三十



醫官等
摩耶夫人の
容體を討論する
圖

三相八十種好具足せり皇太子と申ハ縦跡あらやと問翁答て曰老夫不敏ハ雖ども后妃を観相せりハ天聞通と申く普通の相者の宗親ぎろ秘法ハ九曜七曜廿八宿十干十二支三十六禽ハ星を配當し天地二儀を勘考し五龍七道五陰七儀五位七德を分て四神相應の理を考へ六明大有三質十二運を配列して陰陽男女の位を見定ハ心拳を以て大地ハ擎をぐしたる考文節ハ違ハぐと曰烏將軍亦曰汝左程看相ハ達し皇太子胎妊ぬと見定むる上ハ上一人より下萬民まぐハ幸福なれ慶賀をこそ申ぐれハ却て忌ハく洞を催をハ是如何と咎む翁亦曰さんハ下官老さぐ忍ぐんと申れど甲斐なく貴分ハ御前ハく不吉の涙を流しハ恐ても猶余り有並ぐ其理を言上ぎるハ前ハせり如く尊夫人の胎内ハ孕せぬハ玉ハ如紀皇太子ハく刀剣ハ火の上ハ産落しぬる敢て御命ハ障なく降誕しぬ然ども哭下ハ王として轉輪王ハ位を践ぬ太子ハあるぐ必ず出家学道して妙覚無等の法位ハ昇り一切種知と成清浄法輪を轉じ天人俱ハ利益をなむ。五百の大國三千ハ中國無量の粟散國ハ一切衆生を済度し諸願を満しぬる法王如来と成ぬる紀皇子ぬてぬる法王下官ハ老年積りて九十余旬習ぬ我ぬ身ぬて皇太子の学道成就し一切假生ぬ化度しぬる紀結縁ハ洩人吏の悲しさハ覚ぐ落涙いさしてて赤洞ハぐこれハなる夫人大ハ感歎まり。実りぬ相せり翁ぬ今汝ぐ羽を生て船ぐ胸中風ハ雲霧ハ散しぐ如し烏將軍翁ハ被物を与へ俱ハ王宮へ参て考文のみむ紀を奏せと曰帳内深く入ぬ烏將軍承り數多の金銀絹帛を取出て与れども翁袖を拂く一物をも受ぎ再三勧まぐも猶固く辞しれ為方なく翁を伴く王宮へ参り公羽ぐ勘文の旨ぬ具ハ啓奏しれ浄飯王一度ハ怡び一度ハ憂ひぬ其怡びぬ所以ハ后妃の懐ぬ実吏ぬ中ハく皇子刀剣水火ハ上ハ降延しぬる御命無告しの儀其憂ひぬ所以ハ出生の皇子十善萬乗の宝位を望と申ハ出家学道しぬ久しの吏なり然れども百人の中ハ唯一人妊娠なりと見定ぬ吏未曾有の相者ぬて。睿感斜ぬ多ハ荘園を与行へと宣旨あまぐも翁猶固く即辞退上。杖を曳て退出しぬ其後

王命ニ依テ官人ハ其踪跡ヲ尋ヌレトモ捜ヌレトモ絶テ行方ヲ知者モナカリケリ

摩耶夫人夢裡聽十息說

日月ノ使ヒ来ラザル叟絃ヲ放キ一奔前ノ如ク山ヲ下ル流水ニ似タリ早知月ヲ過弥生ヲ暮テ已ニ卯月ニ入ルニ朔日ノ夜摩耶夫人閑眠シテ夢ノ裡ニ以前顕ハセシ皇太子ノ胎内ヲ分テ出ヒ后妃ノ枕頭ニ住ル君ヲ以前ニ見シ一ヨリハ長延勝リ瑠璃ノ御髻ハ肩ヲ過微妙ノ御声ハ遠ク母夫人ト呼覚ヒ夫人夢心ニ起上リ涙ヲ流シ又愛ニ覚ヒ太子夫人ニ對テ宣ヒ嬌曇捕夫人ノ悪念消滅ノ期来ル丸ク降誕ノ日遠ク過ル明日ヨリ七日ノ間能々御身ヲ敬ヒ給ヘ一時ノ嗔恚ニ倶胝劫ノ善根ヲ焼捨ヒ叟ナレ叟ナレ十相魚漏ノ大海ニハ嗔怒ノ浪ヲ叟ナク瑠璃真如ノ月前横障ノ雲覆ヒ一抑九宿世ノ因縁ニヨリ后妃ノ胎内ヲ借ル母ノ十息報ヒザル期有ベクモ恐ル叟ナリト宣夫人夢心ニ是ハ勿躰ナク仰ギ凡躰不浄ノ身ニ御佛ヲ宿ス一進ル叟此身ノ歓何叟ニ是ハ過ルベキ其ハ遠ク今宣ヒ一母ノ十息トハ如何ナル叟ヲヤ願クハ説ヒ給ヘト問ヒ太子黙首テ曰ク第一懐胎主護ノ息ト以テ孕ヨリ以来十月ノ間ノ苦悩居起ニ心ヲ任セズ仮初ノ物ノ香ニ頃ノ強ク心ノ休ムマモナシ二ニハ飲食禁忌ノ息孕テヨリ五味ノ味ヒヲ失ヒ朝夕食ヲ其ニ遍ク欲セル食味アリトモ禁毒ヲ怕テ敢テ食セズ三ニハ臨産受苦ノ息已ニ産ノ気萌テハ疲ル痛五臓ヲ刻ム如ク八寒八熱ノ苦患ヲ受ル事ニ勝ル四ニハ生死安産ノ息産ニ臨ヲ汚穢不浄ノ穢ル中ニ出生ノ児ノ五躰具足セル叟ヲ耳ニ聞ク五ニハ初声聞夢ノ息已降産一心遠ク魂消夢ニ夢ル如ク手死羊生ノ間ニ一度初声耳ニ入ル我身ノ死生ヲ忘レ早愛憐ノ心弥増健ニ成長セル叟ヲ願ヒ慈悲心何ヲ以テ譬ル叟ヲ養育覆衣ノ息初衣ヲ始テ寒暑ノ衣服ニ心ヲ寄ル叟ハ温ニ暑ヲ涼ク春ノ日長一ヒ以テ花ヲ見ル叟ハ乳房ヲ含ム夏ノ夜短一ヒ以テ夢ヲ結ブ七ニハ親疎朋友ノ息稍成長シテ他ノ小児ト交リ遊ル叟ハ吾ノ子ハ他人ノ子ニ食物ヲ分チ与ヘ戯ノ具ヲ備ヘ其機嫌ヲ量ル叟子ノ成リ一息ノ余也

八ハ遠路遊行乃恩偖成長て遠國他境へ往とそれハ其身ハ家ヲ留まれとも心ハ倶ニ我
ゟ子の行方を尋ひ。家路ヲ回る時すぐハ胸を休むるひまもなし。九ハ盧悪蔽覆乃
恩我ゟ子ゟ罪を犯せそ。他人乃見ん夷ハ中ハ及ずと。父ヲ之覆ひ隠し。或ハ其罪を
身ヲ蒙り。時そヲ練ゟ正を其労苦諭ん方なし。十ハ壽命因福乃恩我ゟ子疾病
あらゝそれハ天ヲ祈り地ヲ禱り。薬餌乃為ヲ心身を労し。甚しそれヲ至ては我ゟ命ヲ代んと
願ハ以上ハ慈母の十恩とそ。六ハ天子より下ハ民家の末すぐも。身ヲ清き者を
侍ゟ仮令雪中ヲ肉をさゝ。氷上ヲ骨を削るとも我身一代ヲ以て。爭ゟ此大恩ヲ報ず
ゟこと難得それ増て況や丸々三年が間胎内ヲ中ゟ。幾許乃憂苦ハ生ける深恩千
劫万劫徑ゟとても敢て報ゝ難ゟ宜ヲそ。摩耶夫人身ヲ捨ゝと思あゝゟ
我ゟ母君もこゝを無量の苦悩を清。船を產ヲ人を。唯ゝとヲ捨ゝゟ乃勿躰
なきよゝと思ヲ。胸ゝと塞リ不覚涙ヲれ。太子ハ頷く其心を知覚ゝ。如
何や母夫人過ヲ夷を悔ゝ。人間乃齢を天上乃壽ヲゝ。夢ゝの如ゝ

唯無為無漏乃樂ゝそ。真乃中の真ヲ具ヲく。抒せね契ヲく侍ゟう。親とゝり子と產れ衆
生の願を充んゝそ無上大利乃功德ゝり。頃て母君ゝゟ御父淨飯大王ヲ對面
ゝ。ゝ人夷の嬉しゃと后妃ヲ抱者む。夫人ヲ抱ゝゟ抱ゝゟ嬉しゃ若宮
誕生ゝ。先烏將軍夫婦ヲ悦ぶゝ。と掻起ゝて縟ヲ蹶ゝ仆ヲと
思召む怪ゝて御夢ハ覚ヲ后妃忙ゝて掌の王を失ひゝる心地ゝ。
借夢乃告ゝ。太子誕生遠ゝ。ゝ夷を知召。七日ゝ間重ゝ慎と
曰ひ夷を心ヲ。翌ゝ朝より身を淨ゝ。奇ゝて六波羅密を修ゝ。人乃眼ヲ
ゝ。天人ゝ那夫人乃左右へ天降リ。緒乃飲食を捧て供養ゝ。

盆毘尼園催花宴

斯て卯月五日ヲ至リ。淨飯王朝廷ヲ出御ありて。高殿乃政を。所ヲ月卿乃中より
瓶子ヲ無憂樹乃花を挿ゝて。献上ゝ。淨飯王ゝ。ゝ。ゝ実蓮ゝ花乃色
朕ゟ園盆毘尼苑ヲ。此無憂樹あゝて。毎年ヲ盛乃頃。花乃宴をゝ。君臣樂

戎もおせーホ戸耶夫人妊娠してより。二年三年吐哀を忘りしより。それ人花の艶光を見る時ハ憂愁を忘れ歓を生ず。朕此程を朝政遑なく。久〳〵摩耶ホ對面せざる来うハ日ホハ盤毘尼苑ホく花乃宴を催し。戸耶が心を慰ん思ひ。不知夫人肯するや否や尋きられよと紹あるに。近臣王命を奉り。直ホ青陽城へ至り。鳥將軍ホ就て宣旨の趣を傳れば。夫人大ホ怡び。昨夜夢の告ホ遠〳〵母夫人ものもホ御父浄飯王ホ對面せんと。胎内の皇子の宣ひハ。此折なりとて。慎で領掌の旨と回奏し。勅使を面りて斯と奏聞し。月景破利遮耶吒耶里乃三宮より。後宮乃女官月卿雲客へ當八日盤毘尼苑ホく花乃宴を催さるべきあり。各参集もべく。由觸らる。彼園中乃借瑵殿を荘厳し。其設を為さんと勅掟ある。臣下奉り緒宮妃緒臣下へ勅命をつゝ。俄ホ盤毘尼苑を灑掃し。清瓏殿を修理し荘厳を磨き。専ら御幸の営を為さん。程なく八日ホ成れば。先十萬乃四兵を以て四方へ清護せ。亦一千人乃婇女容顔端正ホして。老ざ女〳〵ね才知勝れる者を擇び。五色の衣を著せ〳〵。宮侍乃役〳〵。亦一千の顔色美麗乃童女。年齢奇〳〵。身材長短ホ応ず擇び。瓔珞彩衣を著せ。香華を執りむ。浄飯王ハ王冠を戴き。鳳凰乃御衣を着す。七宝の車ホ乗し。月卿雲客前隨後従し。盤毘尼苑ホ入り。光景梵天王乃威德ホも劣り。ホ者眼と恐ろしく。其次ホ月景城の憍曇彌夫人身乃粧装心も紛ぬ。糸ホ扮ち。數多乃女官ホ囲繞せられ。彩鳳乃輦ホ乗て入り。其次ハ破利遮耶城乃好容夫人。其次ハ吒耶里城乃芙蓉夫人。其余後宮三千乃女官。今日を曙と各粧装をつゝし。美麗を究め。清瓏城へ参集し。殿中の中央ホハ浄飯王乃玉乃床を設け。左ホ戸耶夫人乃坐。右ハ憍曇彌夫人乃坐。其次を好容夫人乃坐。其余女官両辺ホ居流れ。一陛陽〳〵三大臣。月卿雲客冠を左へ袖を連て並居し。時ホ浄飯王女官を召し。今日乃大宴の主ハ戸耶ホ定めし。疾々迎きられと宣旨ある。女官畏り〳〵曰。戸耶后妃ハ大王より以前ホ輿を促し。此園ホ入り給ふ。大王乃睿慮を憚り。後宮ホ待ひ。いざ結び給へ〳〵。其

まく立て後宮に奉り。宣旨乃如くむ妃を后妃中あり。ゲ耶夫人八勅命を奉おひ重ね御
身なりに。今日八心いさみ。女官ハ傳れ。徐ハ清瑾殿へ至り。真珠裝奈何とかれ。筆ハ
八色乃絲をとて七種の英を造り。宝冠乃巾子ハはけ。瑠璃破利瑪瑙琥珀金銀
車渠珊瑚ハ七宝乃瑠珞を結れ。羅綾乃御衣乃上ハ花鳥を繡せ。纈纈乃袿を
重ね。碧玉乃石帶を結び。緋乃裳踏まぐれ。丈ハ余る鬢ハ瑠璃を伸てるごとく。
宛傳へる。黛ハ遠山乃殿ハ似く。青蓮乃眸傾國乃色をうち。丹花乃唇百般乃媚
を含む。將ハ是白雪芙蓉乃花乃色露を帶るハ異なるなり。姿ハ三十二相無備へ
八千種好身ハ余まり。今まぐ八花乃如く月乃如く。三殿乃后妃ぐ。三千乃女官
も忽ち顏色を失ひ。漢宮乃天星乃。満月乃影ハ光を奪るハ紡績乃時ハ不思
議なるハ淨瑠璃世界乃御主医王善逝瑠璃光如来虛空ハ降臨まり。微妙不
可思儀乃光明を放ち。ゲ耶夫人乃頂を照し。日月光佛ハ左右ハ立ち。光明
を放ち。四智円鏡化應乃如来。五智円満乃法身如来をぐ。五十二乃聖衆虛空

無我乃光を立ハ。ゲ耶夫人乃容色いぐ照輝くぐ。徐ハ淨飯王を拜し御
姉憍曇彌其余並居る后妃ハ礼を施して。綾乃席ハ就ぬ。此時佛母乃胎内う
在ち。法王如来ハ三密微妙乃神通力ハ。三千世界乃衆生を利益ぐ。奇特と示
ぐ。と思召。平等衆生皆是我子歡喜踊躍乃功德を現し。不遍真如隨緣真
如実相真如三光利益の光を立ハ。我母自然付屬功德と觀ぐ。夫人乃御身より
淨光ハ立ハ。蓋毘尼苑乃花ハ映ぐ。紅白紫黃色彩增。其妙色ハ夫人乃衣ハ
ろいく。錦繡いよく鮮なり。淨飯王ハ宮妃緒卿一度ゲ耶夫人乃面をうれ。心清く
歡喜を生ず。疾病ある者ハ忽ち其病平愈し。ろぐ不測なり。中ハ憍曇彌夫人を
妃夫人ハ君竜を奉れ。頭恚乃焔身を焦し。今日の御宴ハ出るも心進まざれ。倫
言なれど為方なく心ハ。あぐで出席有ハ。法王如来乃威神力ハ。罪障消滅の時
至り。今ゲ耶夫人乃顏をうと等しく。胸中乃猛火忽ハ消ぬ。厳しの夫人の姿
ハ妹を悪ち姉を。兇咀綢伏して出産を妨げ。三年ぐ間憂苦をうせしを我ハ

鬼畜ホ苟ラモ心ヨリ慚愧の涙をとゝめう〇悪念頓ホ翻リ大善心をゞ生ズむひろ滅
や一時ノ懺悔ホ億劫ノ罪消ク無為無漏ノ契リ。佛浄土ノ結縁となるべしの金
言煩悩即菩提心と統むひ。ゝるを中ゝ難有ゝる大慈悲なり

悉達太子降誕現天地瑞異

斯く清瓶殿裡ホ管侍ノ婇女童女杯盤を捧出珠玉ノ吉物ホ山海ノ慈味珍味と
盛陳とり運て已ホ奥宴を始ら大王觴を挙て耶夫人ホ賜ひ。これより献酬こもぐ
ホ女官諸卿ノ中ゆ絲竹ノ堪能ハ舞楽を奏し。乱舞ノ達者ハ舞をゝむぐ。御
按ノ奥をゝ色ゝるホゝ君臣奥ホ入歓喜悦樂限なし。浄飯王睿慮殊ホ麗し。稍酔
ホ兼ゞむひ。敷妙ノ宮女ホ命ゝるハ柳北藍毘尼園ノ草木ハ萬國ノ奇花珍菓を
集植ゝ。四季折々の景観ホ具られ。猥ホ折採て残禁ゞとゝめ。今日ハ耶ゝ意を
慰むゝるゝ。無憂樹を除ゝ。自余の諸花を各一枝づゝ折把ゝ。夫人の前ホ捧よ宜命
ホ夫人ノ意ホ可ひ符ホゝ。たゝん花を折得ゝ者ホ重ゝ褒賞を与行べしと宣旨

ある後宮ノ女官是を奉リて悦いさゝ何年后妃ノ意ホ可花を折得人と廣々た
る苑中ホ咲満ゝる萬木千草ノ花をかりひゝホ折把花枝ホ捧ゝ后妃ホ捧げぬ
まゝ御佛ホ一技ノ花を捧げ菩提の菓を得ゝ盛饌なりゝ
因ホ曰今我ゞ皇國諸寺院淮佛ノ厨子の屋根を草花ホゝ葺ハ此時ノ
遺風なり亦京摂ノ人家四月八日ホ躑躅を天ホ捧ゝ此習なり
斯ゝ亦酒燕を熾ホ奥を増々ホ浄飯王ノ那夫人ホ對願ゝハ御身ホ労を
辞せと苑中弟一の珍花無憂樹ノ花を一枝折ゝ朕ホ賜と仰ゝ后妃敬ゞ
領掌あり玉牀を起ゝ徐ホ無憂樹ノ下ホ立寄ゝホ不思議や此時虚空よ
り金色ノ光を放ち二ゝれの繙天降て無憂樹ノ梢ホ翻飜り霊香四方ホ
薫ゞ苑中ノ草木悉く金色となり諸の石ハ金剛と変ず時ホ夫人織々ゝる右
の玉臂を伸し動ホ花枝自然屈ゝされて后妃ノ御手ゝを近くなびき下ゝるホぞ
是ハ諸天ノ加護ゝ喜しやゝて。手まぢさゝなる花ノ枝を和ら折採んとゝ欲へ

唯我最尊
四維上下
恭達
太子
御誕生
圖づの

忽ち御衣の右の脇を開く皇子突然と降誕し給ふ其時無憂樹の下ゐ七宝七莖の
蓮華生ずを花の大サ車輪の如し太子蓮華の臺ゐ坐ゐ給ふ今すぐ二流の瀑と成
り加ふ注ぐて難陀龍王優波難陀龍王金色二躰の龍神と現じ八色の光を放
ちく虛空ゐ飛揚し清浄功德水を雨し太子の頂より四肢ゐいたるまで洗浴を
蓋し今佛生會ゐ延生佛の像ゐ千歲藁を洒ぐ此義を表せるなり
是ゐ依て太子の御身緒の不浄洗ひなれく黄金の色顯はる毛孔より大光明を放
ちく三千大千世界を照し給へば天上ゐ梵天帝釋萬眷族增長廣目持國多聞の
四天王ならび無數の緒天緒佛薩埵来降し妓華を散し妓樂を奏し金剛合掌
し太子を敬礼ある天外ゐ在る弟六天の魔種顯れ今より永く我が道衰滅を
怨み奉て懊惱し怪悲ゆり是ゐを見る三十四の瑞應あれども文長くれば太子ハ蓮の臺より下りゐひ前へ三足
後へ四足歩ゐく左手の指ゐ天を右手の指ゐ地をさし微妙の初声を發し給ひ
三世了達四弘誓願緒法壓内天上天下唯我独尊と師子吼し給ふ胎金剛部智明

蓮華部是なり。耶夫人ハ太子を産ゐく少の苦悩もなく心得定ゐ入が如く熟生ゐ給ふ
の形を收め無憂樹の下ゐ憩ゐ給ふ俄ゐ地動して霊泉涌出て其水香潔ゐ温な
れば橋曇彌夫人傅の女官ゐ命じて耶夫人の御身其水ゐ洗ひ浄め給ふ烏將軍
夫婦ハ錦の袍を以て太子を抱きとり殿上ゐ昇く浄飯王の睿貧ゐ入ぬるゐ太子ハ緒
の瑞相を眼前ゐ見給ふ今ゐ皇子を見奉ゐ王の如く三十二相八十種好具足
し給へば歡喜踊躍ゐ堪ずして殿上殿下の緒人も勇ゐ悅び皆萬歲を唱く慶賀し奉
りぬ大王烏將軍ゐ命じて耶夫人を輦ゐ載せ奉り乘進ずせ青陽城へ還らせ給ひ若君
八橋曇彌夫人ゐ抱き奉り御身龍駕ゐ乘され蓋昆屋園を玉ゐ入給ふ后妃女官百司
百官前後を供奉し王宮へ還御なりぬ

摩耶夫人逝去

茲ゐ忽ちく不思議なる八皇太子出誕の日ゐ當て釈種の五百王門日ゐ悲く男子と産
ゐ五百王の嚴皆駒を生む何も毛色純白ゐて鬣珠を貫く殊更浄飯王の御

厩の駒殊絶なり名を犍陟と号く。偖も后妃摩耶夫人を盧毘尼園より喜陽城へ還り給ひ後に神身悩み給へ共なれども気力竭く飲食を欲し給ぬ。唯昏々として錦帳の裡に安卧給へども烏将軍ならず宮中の女官胸を痛め時々刻々御容躰を王宮へ奏聞を浄飯王も大いに睿慮を悩し給ひ普く名医を求め治療手を尽させ給へ憍曇弥夫人は賢智なる媫母を撰び給ひ自手を傅て育し給ふ。喜陽城に住して。昼夜を捨て看病致し給へ共付て申す。兄嗟の妻を悔歎し心中に天地に祈誓し給へ。妹夫人の患病今一度平愈せしめ給へ。それも尚能ずして自ら身をとして妹后の命に代せ給へと。丹絨を尽して祈り給へども定業にや其甲斐なく。太子降誕より七日めの暁に摩耶夫人は姉后なるに烏将夫婦を枕辺に招き給ひ仰せられ給ひ。躬とは宿世の戒行いと深く。浄飯大王に幸ひせられ進ぜ給へ。人々の尊敬に逢ひ給ふ。悦楽極まりなく。皇太子を産なり。世に倒なる福分之。然るに今已に現世の縁尽く。無為の都へ還り侍る。素より一念不生の心に迷ひなく悟なく。憎愛の念尽きて煩悩即菩提生死即涅槃と。時に心を残すべき方もなく。

願くは姉君太子を御身の子と思召て慈育し給へ。烏将軍婦夫は今日より姉君なり。自と扶け信ずに傅た仕へ太子成長ありても悪き御行迹あらば練正し給へ。将大王に奏して自ら亡骸を此喜陽城の東なる夕陽山に茶毘し墳の上に無憂樹を植させ給へと願給へ。と。こゝに遺言し坐を端し正念合掌して睡るが如く逝去し給ひぬ。憍曇弥夫人を其侍空し死骸に縋り給ひ。天に恐れ地に歎き悲み道ゆく人々も涙を流し給へ。烏将軍夫婦は怨歎ひ給へ。宮中の女官暗夜に灯を失ひし心地して。くしとく泣怨む声。宮外迄聞へ給ふ。然て斯く果なき夢なれば烏将軍泣々王宮へ参内し。摩耶夫人の亡骸去のよし奏し給へば浄飯王あつと許に皆倒て歎き給ひ。偖も過ぎる花の宴に摩耶の姿の花を散らすべき兆なるかと。階老の契を捨て身性の忍辱を朕も。朕を内に道に伴へと。叫び給へ。夫人を思ひ給ひ。御衣の袂も御涙に絞るばかり。哀れ三大臣百司百官後宮の女官妹女。銭洞に咤ぶことの者なし。月光臣帝を練めなり。死生もとより天数ゆゑ后妃臨終の一句中に煩悩即菩提生死即涅

槃と曰ひ上八定まれる命數を知無上菩提ホいとり玉ふ吏明々深くホ歎たまひそ
とホより淨飯王よりホ御涙をくゞめ玉ひ春陽城へ御幸有て后妃の亡骸ホ
對ひ玉ホ花の顏生玉ホ如く些も容色変ぜざれば愛者の念を禁ず久玉
ひ此侭宮中ホ留めまゐらく思召ど理りなる故ど臣下の練奏黙止ざるの況なく
亡骸を收て香水の棺ホ篭遺言なれば夕陽山ホ送り種々の供養數を盡し
終ホ香薪を積りけく荼毘し玉ふ噫呼怨しいかさも綽約たる桃李の姿も
度無常の風ホ解き夕陽山下の煙と倶ホ消玉ふ哀きなり御吏たり斯てその
玉骨を七宝の音ホ据納地景を占て埋葬し盤毘尼園の春瑤殿を夕陽山
ホ移し十六丈の窣塔を建廟前ホ無憂樹を移し植させ玉ふ後年世尊成
道して迦毘羅城へ還幸なりぬ時青瑤殿を梵刹とし尸河摩耶山切利天
正寺と号玉ひ茲ホ憍曇彌夫人の傅官馬將軍ハ尸耶夫人の逝去あらんと
ぞく深く慚愧し生命ホ兄咀をなし墮藥を勸め罪の深さよとて我と

先非を悔ゆ乳の病を發し尸耶夫人薨去の後十五日ホて終ホ気絶たりける
悉達太子入學阿私陀仙示三十二相
結跏趺曇彌夫人を深く前々の罪を懺悔玉ひ其罪を償ん為ホ皇太子を我
ゆ子なる慈を育るホ如ごとく後宮の侍女の中ホも才智勝れ者を數多擇出
し守傅を玉ひ淨飯王まゐ皇子の為ホ新ホ三時殿を建玉ひ夏ハ涼し冬ハ温なる樓閣ホ
太子を生し玉ふ冬ハ温なる殿裏ホ育し玉ひ衣裳服飾花麗を極ごとくなし
斯く若君三才ホ成玉ひ初て泰内ホ出玉ひ其容貌を睿覽あるホ胎内
三年居玉ひ其ほど六七歳行の如く言語動止則ホ合ひ天ひなる玉顏光りて
ホ紆たれば御恰斜なるど文道の博士を召れ皇太子の名を撰せ玉ひ博士ども
敬て奉り古戎尋新を推て綸綸し玉て王ホ奏ゆく皇子御降誕の時三十
四の瑞應ホ及び諸の奇持悉く達せざるとホ吏なく因て御緯を悉達太子と呼
なりぬ此名甚だ好とて數々の賞禄を博士ども

ふ事ハ皇子より緒人皇子を悉達太子と称し奉り尊敬すること太子ごとく烏将軍ハ
太子の日ふ蘇〻く生立ちを見るふ也。広耶夫人此世ふ在で何ぞ悦びなくんと思つ〻
懐旧の涙ぞ流る。せき〻夕陽山の廟へ太子を結ひ奉り御母后妃の尊霊を慰め
進せ奉ら〻。犒曇彌夫人ふ其更を十上るふ実〻も心付〻ふ。さぞふ妹夫人の嬉しと
思召らめ自ら且夕忘ら〻ひまなく幸ひ卯月中旬ふ太子を伴ひ夕陽
山へ詣ぞ。此更大王ふ美せよと命じ給ふ烏将軍領掌し奉内して廟奉の義を願
ふ。子細なく勅許ある旨ふ依て犒曇彌夫人姉母ふ皇太子を守傳ら世烏将軍夫婦女
官數多召具し輿車ふ乗して夕陽山の廟ふ参詣あるふ松柏蔚茂し草茫々たる烏
雀物怨しげふ啼風ふ揺ら露ふ袖の涙ふ争ひ〻盛者必衰の理眼前ふ見え廟の
前ふ稚〻植られる無憂樹の花ハ昔ふ咲ぬまど手折し主ハ苔の下ふ朽果さふ
七宝荘厳の宮殿楼閣ふ往人かれ荒のみ勝り空し〻狐兎の栖と成る先景見るふ
付ても涙の種なるぬ〻。犒曇彌夫人ふ緒人ふ不覚ふ袖を絞り給ふ太子

幼ち御意ふ無憂樹の花を愛ひ木の下へ近〻と走寄烏将軍を召れ彼花を折よと
仰せらるふ烏将軍ハ故夫人の此花を折人〻ひて御産の気ふ成ぬ終ふ逝去ひ
たとみひ出るふ胸ふと塞り涙さしぐむて。左右の若ふ成ぬ壮年して傅き居し
折節風ふ強く村雨一陣降きたり烏将軍遽し〻太子を抱ち堂内へ入るふ
太子大いふむつり何ぞ花を得させざると責ひ烏将軍ふてあま〻ふ今ふ若
君や人ふそそ三年まで孕りひ終ふ母君を見放し奉る此花ふ此花と
御母后ふも見ひ両を厭ひ風を防ぐひてそ御孝行なれ増て枝ふんどを
仮ふ折せ奉ずと練さるる。犒曇彌夫人ふ堂内ふ妹后の霊を祭り供養
して居ひ今烏将軍ふ言を聞て身ふ冷汗を流ひ三年ふ間妊娠せハ自ら所為
なりと且夕居起ふ心苦〻く思ふ許ふ成ぬと心中ふ懺悔し慚愧の涙ふ暮さふ
太子ハ烏将軍ふ言を聞て母君ふ成る御名ハ何と。何ふ〻
逝去ひ給ひ〻と問ふ烏将軍ふ妻是を哀れと思ひ種々言なぐさめ奉れども只管

尋問へ止むがれじせんとぞなりて花の宴の折へ右脇より降延あり後七日みへ
逝去あり。遺言に依て夕陽山に葬り無憂樹を移し植まぐあへり結りほすせよ
ぞ。太子推心に悲しへ思ふ雨と泣むひ並び猶彼花を折へ得させよ母君と思
旦夕にうんと仰をろぶ。是悲なへ一枝折へ進せんぞ。限なへ悦びあひ花瓶に挿て
れせどなりぬ。斯て長月日も傾たれば。幡曇彌夫人太子を誘ひまつり青陽城へ還幸
しぬ。其後年月をへ太子五才になりぬへば加冠の儀式あり淨飯王臣下に勅して七宝の
玉冠あひ瑤珞を造て加へ。あひ偖七才にせむへば父王普へ四天下に觸て。射藝の堪
能を召る。太子に射術を学ばしめ。一月を限て悉へ妙所を究ちぬ。射
師大に驚歎へ是凡人にへ在ぞと言を卷へ。其余絲竹乱舞を始諸般の技藝を
学ひ習ふに。旬日にして温奥を悟覚ぬ。ぞ諸人益奇異の思をなへ。偖八才になへ
ぬへば父王太子に文道を学ばしめんと思召。群臣を聚へ。維へ太子が文道の師範とす
ぞと勅問あへ。月卿雲客奉り。維彼と其人を撰へ論ぜるに。尉頭賢弗に勝る。博
学多才の人有ぞへと衆議一決へ。此旨奏聞へ。それ並び賢弗が方へ遣へ文道と
学ばしむぞへそ。先尉頭賢弗を召へ。太子の師範へるぞと旨勅掟あり。次に月
景城へ右の旨を仰渡されぬ。幡曇彌敬で領掌へ。勅使に就て回奏へ。
扨。太子御入学の吏最上の御吏に。博士の紆へ奉りぬ。女官のみも似合へ
ぞ。何年御学ひの友とあるべき女年を擇へ太子に扈従せむへと願へ。大王
理りに思召。維へ太子が文道修行の友となるべきと諸臣に問へ。星光の嫡男烏陀
夷年齢十三才。賢明にして智才人に勝れ。是に如ぞへと奏へるに。即ち星
光臣へ勅命下へ。烏陀夷を太子の扈従に仰へ。星光大に悦ひ
家の名誉是に過ぞと敬で領掌へ。偖烏陀夷を近く招へ。汝を皇太子の御扈
従に仰へ。倫命下へ。是願ても得ぞ幸福へ。能く身を慎へ心を謹
へて太子に仕へ。片時も御傷を去ぞ。俱に文道を学ばしへ。ねんごろ教訓を加へ月景
城へ進へ。幡曇彌夫人御悦へ。此余俊才の童子十余人を擇出へ扈

從て吉日良辰を擇び太子を輦車に乗せ嬪母女官緒童子殘隨從せしめ博士爵頭賢弗が方へ參せ給ふ。賢弗半途まで出迎へ敬て鳥駕を拜し。我が館へ請じ入れ學の儀式嚴重に執行ひ是より太子を別館に留め先文道の揩揮なれば筆道を學ばせ給ふ。本來本覺如來の化身なれば初て筆を執て學び給ふ事一旬の日を待ずして天性不測の筆力田鳧麟馬虎頭の畫柔心雲懸河飄竜の点悉く法に合ざる事なく賢弗も及ざる事遠し。心中大に驚き恐れ自ら慚愧に勝ざ猶も太子の才を試んと二百部の世益編百部の緘締編二部の和書を採出て太子の御前に置き君此二部の書籍の内御意に學びんと思召書を擇ばへ何なりとも教授なしまゐらんと申。悉達太子二種の書の外題を見給ふに一は神妙妙奇集とあり。一は殷心報謝編とあり。太子心中に思召す。神妙妙奇集は仙家道術医術の書なり。國家に益ある書なるべし。特殷心報謝編は上求菩提の書なりと明け

抑九轉輪王の位を踐て四天下を威伏せるとも百年の栄花を極る事能はず。凡そ母君已に強抱の内に逝去ぬ。半月の孝養なりとも其鴻恩を報ぜんには出家學道して一切種智を求め。母君の靈を弔て永く生死輪廻を離れんこそ有べく乃孝道なるべしと胸中に思慮を定め偖賢弗に對ひ丸は唯緘締編をこそ學べやと仰ある賢弗心裡に驚き此太子國家有益の書なきに上求菩提の書を望給ふは萬乗の帝位を踐ずして御意なり。出家得道の御望ありと覚る。若我が許に留堂して内出塵まで國王の責を免る事能ず。唯早く宮中へ還して其はハ不如と流石博才の賢弗。太子の胸裡を暗に知覚し其日は程に談論して其日を早天に館舎を出て王宮へ參ぜんと奏し官人に就て奏せしめ皇太子聰明睿智なる事を聖王を崇く萬を悟り給ふ。古今いまだ曾て有ざる。後世猶有まじ。況神妙なる在臣に教導なる事なれば仰願くは宮中へ還して別に良師を擇ん御師範とし給へと。淨飯王不審ひ太子汝が所に留学なる事いまだ義所あるべし何の義

達せる吏有てう斯や。賢弗ゞ曰皇太子書を学ぶに初て筆を下し給へ点
畫悉く法に合ひ自然に龍牙虎爪の勢ひを具す。所書籍を用ゐ給へば天文地
理礼則筭數ならび。緒道の理に通ぜざることなく。愚臣ゞ及ぶべき吏遠くに
浄飯王に曰。此ゞ維耶太子の師とすべし。賢弗肚裡に念ずる。悉達太子已に
厭離出塵の望在と。我此義を奏せば大王敢て信じ玉へ。但し維耶里國香山に住
る。阿私陀仙人は神通廣大の賢仙なれば。渠を招き太子の師範たらしめば。決
定太子の出家の望在を知る。太王に告ぐ。浄飯王其言を信じ。太子と宮
中より出し給ふ。皇子も歓楽に堪へず。自然成道の望を断ぜんと思惟し
給王に對ひて曰。太子の師範たるべき者人間中に有ずや。茲に維耶里國香山と
て深山に阿私陀仙と云賢仙の人神通廣大なる通ぜざる道もいなぶ。大王是を召て
太子の師とし給へと奏す。浄飯王悅び給ひ。賢弗に御暇乞り先千人の宮人に輦
車を輦しめ。太子を宮中へ迎へ還させ給ひ。給維耶の香山へ勅使に遣はすべしと群

臣に聚て詮議あるに。其道數千里にして其間大河嶮山ありて往安うしがたし。誰有て恭
らんと云者なく空しく時日を送りぬ。此時彼阿私陀仙人を香山に在ながら天眼通を
もて浄飯王の意を識雲に駕して一瞬の間に迦毘羅城へ飛来り王宮の門に立給ふ
門の監平是を怪ミて其名を問ふ。我は香山の阿私陀なり。浄飯王我を招ぎ給ふの意を
知て来りと。答監平猶疑ふ。執奏の公卿に就て斯と奏達す。浄飯王是を聞て
大に悅び。百官に命じて出て仙人を迎へ殿上に請じて對面し給ふに面熟せる吏なり。
両眼星よりも明らか。髭髮悉く紫ゆく。殆塵俗の類にあらず。大王深く尊敬し。其来
意を糾し給へ。阿私陀白。我前に大王の太子。盤毘尼苑無憂樹下に出世し給ひ三十四
の瑞應現じ。七歩あゆみて法螺を發し給ひ。を聞ひぬ。然に爾頭賢弗我を召て太
子の師とせよと奏せば。渠が一時の方便なり。我に太子を相せ。大王に告る所あらしめ
んと。我に神通力あり。大王の意を識て。王宮へ来れり。願くは一度太子に見しめ給へ
と告。浄飯王歓喜に勝ずして阿私陀仙と伴に宮輦を促して月景城へ行幸あり

憍曇彌夫人ホ對。仙翁ノ来意を示。悉達太子を召て仙人を礼拝せしめ給ふ
阿私陀忙しく抑笛太子ハ是三界中の至尊。何ぞ吾を拜せしめ給ふの理あらんと
自起て合掌し。太子ノ足を拜とる事三度。憍曇彌仙翁ホ對ひ願くハ
神仙太子を観相し給へ。将来ノ獨福を示し給へと仰られぬ。阿私陀諦て熟々太
子ノ相貌如び四肢を見て。一賞三嘆し。此君実ホ三十二相を具足し給へり。
王位を践ム人ハ十九ホして轉輪王と成ム人ハ出塵し給ハ一切種智をなして
天人を済度し給ふ。ホ尊やと。亦三拜を浄飯王問ホ奉ル。三十二相とハ如何
なる事をいふや。阿私陀太子を指て曰。一ホハ頂髻肉成。二ホハ眉間白毫白輭ホ
三ホハ眼睫牛王ノ如く。四ホハ眼色金精ノ如く。五ホハ音声迦陵頻伽ノ如く。六ホハ舌
薄ホして面を覆ひ且耳ノ際ホ至る。七ホハ咽中二所より津液流出て八ホを味中上
味を得。九ホハ方頰車師子の如く。十ホハ四牙最白く大ホ。十一ホハ齒白齊密ホして根
深く。十二ホハ口中四十齒あり。十三ホハ肩圓好。十四ホハ身廣端正。十五ホハ師子王の如く

十六ホハ両腋下満て。十七ホハ両足下両腋下両肩上項中皆肉髻の
相あり。十八ホハ皮薄く細滑ホして塵垢を受ず。十九ホハ身ノ色微妙ホして閻浮檀
金ホ勝リ。二十ホハ毛上ホ向靡青色ホして右ホ旋リ。廿一ホハ満身ノ毛孔より悉く
一毛生し輭ホ廿二ホハ身ノ縱横等く泥倶盧樹ノ如し。廿三ホハ陰藏相象王馬王の
如く。廿四ホハ平住両手膝を摩。廿五ホハ脚腨纎好伊尼延鹿王の如く。廿六ホハ足趺
高く平ホして好跟と相稱。廿七ホハ足指合縵網金人ホ勝る。廿八ホハ足跟廣く具足
満好。廿九ホハ手足柔輭ホ金人身分ホ勝リ。三十ホハ手足指長く。廿一ホハ足下千輻
綱轉輪相を具。廿二ホハ足下安下盌底ノ如く。遂一ホ指示し給ぶ。浄飯王感伏し
むひ亦問ホ。朕が太子已ホ如斯好相あれど福是ホ過ぎ。並と重在せば轉輪王と
なり出家せば一切種智をなるべしと。此両端雲壤ノ違あり。朕衰老ホ及ん後ハ國
土を太子ホ譲リ。身ハ山林ホ閑居して風月を翫ん。願ハ太子出家学道せ
む。維ホ王位を譲るべき願ハ神仙両端ノ内ノ是なる猜く考て示し給へと

仰ぎて阿私陀仙人の天機漏しなどかくまでと遂に知られたのまと答へ袖を拂ひて座を起ち手をふりて雲を招き蓋を乗じて虚空に昇り香山をさしてぞ飛去りぬ

悉達太子与提婆達多競技

浄飯王は阿私陀仙人が飛去りぬるを見おどろき心中に疑惑を生じ。昔百人耶夫人胎内三年にあひし時百人の中に一人の相者胎内の太子ありて成道正覚して衆生を済度せんと云へり我思へば若此太子朕を捨て出家得道せんにおいては頗る昏慮を煩はしむべし。五百人の女女の容貌端麗なる者を擇び太子の左右に侍らしむ其旋嶽の説物具へたる事なり。且暮歌舞吹奏して太子の心を慰しむ是その悦楽をもて厭離の心を消せんの御心なり。斯て太子十歳に成る春正月恒例として小弓ちぎりの式あり浄飯王諸釋種の貴胄を召其役を定む東方の大将を悉達太子とし副将を難陀露飯王の皇子廣耶太子とし。其余百人の童子の俊才を擇び従へり。西方の太将を斛飯王の皇子提婆太子とし。副将を白飯王の皇子鉢陀太子とし。百人

の童子の奇才を擇び従へ。偖城中に射場を構へ警固の官人四方を守り楼上に浄飯王出御あり三大臣ぞろひ月卿雲客も位階に列り小弓の勝負を見物す。当年十九の悉達太子始めて小弓の頭をとりむかへ東西の諸童子の親戚今日を曠と花美を盡して我見を扶せ烈を正して射場に移り入先景緋に挑李の咲そろひ如いと栄ありてぞ見えける。斯て小弓の式を始るに其最初八弾丸的にて四すの玉放て空中に投上其落下る所射る法なり西陣より丸を弾ぜば東陣より出て是を射東陣より丸を弾ぜば西陣より出て是を射る毎に金音通の的に当事疑なし。空中より落る玉なれば飛鳥を射るよりも尚難く誰か能射中る者なく偶ま玉を射削る者あれば是を高処に賞衣を賜はり。其八人揃へ西東互に射術をたぐへ丸を射て勝負を争ひ東陣多く勝て賞衣を賜る者。西陣に倍して多し。誰か力有のこと難ぜん射術は五天竺に敵なしと申す。件の達人共。副将の

鋼陀太子ハ提婆ニ劣まじ。況荒童子なるべしニ西陣の敗せし成ハ俱ニ怒
気を生じ。今ハ東西しもニ頭副将ハ勝負をれば如何して射勝恥辱を雪人
ものと。鋼陀太子力腕を摩。射場ニ立出て。一丸を揉て虚空遥ニ投上る廣
耶太子弓箭を番て兵ど射る。遥ニ丸を射削て。浄飯王ちゝ。諸人これを
誉。即ち賞衣を賜。廣耶太子息を継。亦一丸を把て虚空ニ投上る。鋼陀太子
弓箭を番て是を射る。閃ハ丸を射削て落せ。君臣亦賞誉して賞物
を賜ひ。此一番ハ勝負互角なり。次ハ両陣の頭ハ勝負かれば國王ハ中ニ及ばず月卿
雲客下ハ官人ハ。瞬もせず守り居る所ニ西陣より提婆達多。錦繡の装衣
ゝ。びやふ手扮。意気揚々として歩出。悉達太子ニ一揖。丸を把て膂力ニ任し
虚空遥ニ投揚ル。無数の金剛力なれば。其丸アラ〳〵と鳴響て半天より流星のごと
落下る。閃ニ悉達太子ハ百花の繡せし羅穀の御衣ニ緋の裳をたゝ黄金の強弓
ニ鉄箭をたゞび。満月の如く誓ひ。虚空ニ向ひ。兵と射る。四すの丸を射削

地上ニ噹と落。萬人是を見て感賞する声。女時ハ鳴り止ざりけり。提婆ハ太子の射技
を見て大ニ驚ク。我ハ丸を射貫ばこそ。誓て此場を去ん。と意頻ニ焦燥。弓箭を
たゞき待ケり。悉達太子ハ提婆ハ憤怒の気わゝ。早く察し。玉ひ。何乎渠ニ
ハ手柄を与へ。心ニ念じ。徐ニ丸を把て。投揚る。ニ此丸アラ〳〵と鳴て。矢頃能落
下る。待絶ず。提婆達多。やとけ声して切て放つニ過ぎ丸を射ると。虚射貫こと
能ハず。只射削のみなり。諸人ハ是を誉といへども。悉達太子ニ及ばぬ。あぐれば
提婆ハ頗る面目失ひ。心中ニ深く憤りぬ。是ぞ遺恨の初なりける。諸弾丸の儀式
畢り。次ハ鐵敷的の式なり。是ハ童子の力ニ甘ずるに非ず。堅を砕の義を表
し。されど。唯的の中ニ成ば。高手ハ。並ども提婆達多ハ悉達太子ニ弾丸の的
を射負ける。憤怒止ず。此度ハ我鉄敷を射通し。悉達ニ恥辱を与へんと意ニ
巧み。鋼陀ハ其旨を示し合せ。數多の童子の射終を待ニ已ニ廣耶太子ハ番ニ
ハ。及び射場ニ出て。鉄敷を射る。的ハ中ニ成ば。鏃砕て飛ぶ。鋼陀太子微笑

泰達太子
諸太子と
射術をこゝろみる
図

提婆旃陀
両太子力競の
図

徐ろに出て鉄弓をきり〳〵と弯絞矢声とともに切て放ちぬ。一の鉄鼓を射貫く。諸人是を見て其弓勢を感歎す其次に提婆達多鵬の歩の如く寛々と射場に出握太なる鉄弓を弦弾し。鉄箭をとりてきり〳〵と弯絞ぬ。弦を固く弩と射る。遥〳〵と三つの鉄鼓を射貫く。満庭の人々呵と感し。天晴無双の弓勢なりと賞嘆す。提婆はちらり顔に太子の方を見やりて本座に回る。今は太子のまなこ浄飯王すでに百司百官の手に汗握り乾渋を呑ごん居る所に太子徐々弓を前に手挿く射場に出ひ絃弾して左右に封ぜる弓を持きれしと命じ給へ宦人承り〳〵強弓七弓を抜出して奉る太子七弓の中に殊更強き弓をむ撰出し。箭を打たゞ満月の如く弯絞ぬ。声ろ〳〵と切て放ち。其矢ヒイフツと鳴さりて的の中ろと見えるる。七つの鉄鼓を射貫し。尚余まる矢巌を穿忽ち清泉湧出さり。上帝王より下甲宦に至るまで感嘆まる声四竟に響く行ゆく末びさ〳〵ぞ生えるる烏将軍の嬉しさに坐を起て舞うたてり。浄飯王は

睿感浅〳〵ぞ太子をまづめ提婆以下の諸童子に褒賞を賜ひ。大に酒宴を催し君臣和楽の興を催し。また提婆は二度の曠勝負悉く太子に負まる事を遺恨に思さ〳〵れさに大鰐を把く敷杯を傾け。酒気に乗じて廣庭に狂ひ出悉達太子射芸に堪能なりと亜筋力に於は我に及し。力量の負おろん者は来て我と角觝の勝負を試よとぞ叫びける。是を聞く諸童子の中に筋力ある輩。憎に提婆が廣言ぞ。

ゑゝいでや力比競んと我も〳〵と庭へ下て。提婆に向ひ合掌あると亜維あり〳〵勝者かく。手足を折く逃退に神陀太子のまた提婆と力量等〳〵。吏に勝負を分〳〵ぞ。掬引に堪れり悉達太子二童の肩能を見く微笑し。ひ先に戯に力を競ぶ〳〵そ後容〳〵て庭に下ひ提婆神陀二童子を一奇に〳〵せ。右に撲左に揉ぐ勝負を挑む。提婆は悉達太子乃資力に強ぎ。何年勝を〳〵。射芸の遺恨を散ぜんとの。神陀に同結し。精力を厲して抗拉んとれど争く太子の威神力に敵べ。両童も終に力養へ。大地へ〳〵と投られり。並ども慈心を〳〵〳〵投ぬ。二童の

些か傷れ痛みなり。緒人亦感称す。太子萬歳に達し玉へのこゝろざし傍力に人に
勝れ給へり。城に古今未曾有なりとぞ。提婆に教唆の事を好ぐ。三度恥辱をうり
熱腸を涼まさに由なし。不奥げに従者を引ぐ。城門を出るに先驅の者遅くして
回り。城門の外に大象有り。門を遮り敢く動ぐこと能ぐ。提婆大いに怒り。眼先
に立ち城門に到りぬるに果して大象門に横り。牙を怒して倚立す。提婆女なれども怕ず
色なし。進み倚り拳を固め象の頭を噛と撃ぶ。さしらの大象金剛力に搏きく地
に躃き端ぬ。提婆が従者是に依て難なく門を出る事を得ず。次に調陀まく眷
屬を引従ぐ。城門を出る前行の者立停て進まず。調陀其由を問従者が曰。先に城
門に大象遮り立ち路を妨げを提婆達多一拳に撃倒して今城門の傍に喘臥す
る哉。緒人群見て路を塞進ぐ。いと苦調陀宣く。我も其象を見んと。群聚を推分
象の辺に往ぐと見て歩美是畜生何ぞ我が行路を妨ぐ。足を以て噛と
蹴に問く金剛力なれば五尋ばかり飛び堀隍に仆臥す。苦く死に向より。緒人是を見
て提婆調陀に筋力無双なりと称て見る者倍山の如く其喧しき音城中へきく
れば悉達太子迎臣を召て何事にやと問に斯々と言上す。太子微笑して罪
なき獣類に追退ぞ。猥に傷痛しむるや。九其象を救ひ得させんと。従者を率
て城外に立出ひ件の象の辺に立寄王の如く清き御腕に象の牙を抹曳起
ひ。さしらの大象怪なと引きられて身を起す。もろも若痛頓に愈て甦り。太子を見
て耳を垂尾を伏て拝謝の躰をなす。山路をさして走回りぬ。緒人亦是を見て。提
婆調陀筋力壮なりと雖悉達太子の大象を曳起す甦り力に及ばず。
称讃すべきなり

浄居佛一説悉達太子

年月推移て悉達太子十五才に成ひぬれば。浄飯王百官を召聚勅旋有べきを
太子年已に十五才に及びれば先例の如く四海水を以て太子の頂に灌ぐ春宮に立
べし。此旨小国の王に触れ告せよと命ある。月卿雲客奉り緒国の王に撒文を傳へ

提婆太子大象と擊圖

當年二月八日悉達太子春宮ゟ立せ給ふゟ京先例の如く其儀式行はせらるゝ間列位京城(朝覲有ゞ)とゞ觸ゟる。是ゟ因て諸國の小王五百の釋種聘物を捧て我もくと迦毘羅城へ參著す。斯て其日ゟ成ーるゞ淨飯王大殿ゟ出御あり諸國の王ゟ參列ー。文武の群臣ゟ位階ゟ侍て並居り其時悉達太子羅綾の御衣を著ゟ玉ひ七寶の寶冠を頂き官人ゟ傳ま立出ゟ(で)頓て繒蓋を掛名香を燒花を散ー。妓樂を奏ー舞をるゟ(で)ーゟ。其後白玉の盤ゟ四海水を湛官人是を捧げ出先甘露飯王是を奉る。甘露飯王是を頂戴有て白飯王ゟ授て白飯王頂戴して斛飯王ゟ授て。是より諸國の王坐順ゟ受傳へ月卿雲客迫戴畢り。祝賀を奏して淨飯王の御前ゟ捧げ奉れば。帝盤水を捧けて天地を拜ーゟ玉ひ盤水を太子の項ゟ灌ぎ高声ゟ唱て曰今日悉達を以て春宮ゟ立朕が世嗣と定る因て今天地ゟ告諸國の王乃至五百の釋種群臣ゟ是を告と。其時太子頭を低て拜謝ー玉へば。帝御手ぢて七寶の印を授ゟ是ゟ上て殿上殿下ゟ參

烈の人々一奇ゟ萬歳を唱各王聘物を獻上ある。其數無數ゟして珠寶名珠金銀結帛殿上ゟ一座の山を築て淨飯王歡喜斜なりゞ。これ〳〵ゟ官爵を加らを大宴を開て諸王諸臣を饗應ーゟ玉へ滅芽出さるゝ光景なり斯て後ハ太子の御威位前ゟ百倍ー花顏柳姿の宮妃五百人風姿端麗の童女一千人晝夜太子の左右ゟ仕奉り。糸竹の調歌舞の遊具ゞと云吏なく太子の心を慰まるゝ。然ども太子ハ却て是を懶おのゝ玉ひ且夕只烏陀夷ゟと書卷を開て。古今ゟ眼をさらし書毎ゟ其理を究玉へども尚良師なれを憂ひ玉ひ快々として樂ミ玉ひ。ゞ嚬墨彌失ハ此体を見て心を痛め玉ひ斯て心気を結び患病を生じ玉ひ。只其意を慰なるゟハ不如して太子の宮中ゟ到り御對面の上仰ゞるハ太子頃日顏色勝玉ひ。是宮中ゟのみ在て外ゟ出玉ひ。ゞ有なるべし。幸ひ時今春の季なれば監毘尼苑ゟ出遊ー。艸木の花咲ゟ見御心を慰玉へと練玉へ。太子天性至孝ゟ在て母君の御意を背

〻と敬で領掌ありしかぞ憍曇彌悅おひ烏將軍をもて太子盧毘尼苑へ
御出遊の旨奏せの上園林をもてひ淨め殿宇を莊嚴させ容色勝れ
女樂五百人を置山海の珍味珍菓備ゑとの事なく准備十分に調へぬ烏將
軍月景殿に詣して太子の光駕を促しまつる。太子は出游を樂まおはざれども母公
の仰を背かぬ厭烏陀夷をもてめ數多の近臣兒童を從へ宮葦を面して城
の東門より出游しまつる。天上の淨居佛悉達太子の悋樂に愛著し本願を
失忘あらんかと疑ひ其心を試んとて。神通をもて化して老さらぼひし翁となり杖
にもたりてよろよろと貧賤男女の太子の行粧を拜見もて中に交り路の傍に停立
ぎろぎろと眺居う。警固の官人是を見て大いに怒り此老奴何ぞ路頭にさまよひ出て
太子の御光臨を妨るやと罵り棄て拳を舉て嗚と擊。老翁は強く擊れて其侭地
上に仆卧う。太子宮葦の内より是を見おひて急に宮人を制し是は何なる拳
動ぞや猥に人を打擲痛しむぞとて。從者に命じて扶起さしめ。偖烏陀

夷に問て曰是を何者とうかと烏陀夷答て是は老人にてはとも。太子亦何を老と
いふやと問ふ。曰此人も昔は嬰兒童蒙なりと雖も年月傳らぬ皮膚衰へ血肉遂に
枯くうる姿となり餘命幾許もなし故に老と申せりと答。太子亦問ふ此人而已
為や一切衆生皆如斯なるや曰貴賤ともに何人も老はざるなし一切衆生皆彼翁が
如くなりけりと。太子此幻を見て歎息しおひ実や日月流邁して時愛に歲移り
老の至ること電の如し身富貴にして博論王の位を保とも寄ぞ頼ふたらん世の人何ぞ
う博愛の世界厭ぐべきと類に感慨の心を生じおひ厭離の舟に胸に充て園林に
出游せぬた御意失て烏陀夷を顧て曰く汝俄に心地例なしぞ。今日の園游を止
るべし車を返せよと指揮しまつる烏陀夷大いに驚て是は如何なる御意にはや烏將
軍園林を掃淨し女樂を設て事し光臨を相待に半途より回りおはん事大王國
母の御意をもぞりまつるに至りは人と練られども敢て承引しおはざれば烏陀夷已事を
得ず官人を以て烏將軍に吏の顛末を告げ途より宮葦を面して月景城へ還幸の

しなりられむ。烏將軍大いに望を失ひ。こゝろの結搆画餌となり手を空しくして立回りの幅
曇彌夫人八太子の早く還幸あり給ふ異むひ烏滸夷を迫く召き其友を問ふに
烏陀夷隱を吏能ぐ有り始末を告上幡曇彌夫人を空て憂むひ斯て八相者の云
し如く太子王位を嗣ことを好むぐ出家学道の望おりとおやと安心もなく浄
飯王お右の旨を密奏しむひ倍游楽の具を増厭離の念を止もんと計むひ

浄居佛再試悉達太子

悉達太子八園游の道路老者を見しより頻お世をそらをむひ左右お侍る美貌の女
官を見むへど御心とする事なく。綠竹の青〻たる耳喧く赤〻と咲ぬ机おより書籍を閲
偈を作るんで日を送りむひ浄飯王八日お官人を遣り太子の行迹を問たくろえ世む
お吏お樂を以て休なく晝夜書卷をのみ明くしむ由なれど甚ぶ宸襟を悩しむ
ひ何卒其心を練り慰め王位を繼り幸んと群臣と計り新お城南お山を築き萬
國の珍木奇草を集く風流お種なく十歩お一亭二十歩お一樓を建珠玉を鏤ぬ

金銀を鏤て花叢を尽し。嶺お八瀧を落し禁お流を湛へ山水の奇觀描なせお
ど如く造営太子の游覧お備むひ其巧已お畢れば烏將軍太子お謁し假山成
就の由を告光駕を促しまるお太子も此程引籠ての居むへば外遊を悅びむひ
烏陀夷をすゝめ児童女官を従へ城の南門より出むひ浄飯王八先お太子出游の路
老者を見て樂むひど車を回しむひを思召此度八緒外吏お令て太子通行の路
上老人病者至り汚穢不浄の者を固く禁じ拜見の男女十才より二十才を限其余
八拂ひ除道路を浄め花を捧香を焼しむる。若老人病者不浄の者を在しあ
ば濯掃の外吏罪科し重く刑ぜしと勅掟ある是お依て諸外吏畏り王命の旨と
人民へ觸ること行幸の道路お八塵一もなくもあらせど増て老人病者八厳お除
ぞお浄居佛お太子の逸楽お著し道心失むひ亡とて其心を試んと病者と
化して身瘦腹脹お肉拮骨露顔色黄瘦呻吟して路の傍お悩し卧警固の
官人是を見て大いお驚き王命厳く前々より老人病者不浄の徒を路上お在と

まゝと觸るゝを不浄穢の者を置るゝと罵り騷ぎ急ぎ是を追退人
〻と太子早く宮輦の内より官人ホを制し驚と呼ぶ事ホ已ホ死ホ向たる形相なれば
甚ぶ憐の御心生じ烏陀夷を召て是ハ何者ぞと問ふ烏陀夷答て是病人なり
と。太子亦何ゆゑ病者と云やと問ふ曰此者と壮健なると魚嗜欲ホ恥り飲食の
度なれホ依て四大調ゝぞ遂ホ病を發し百節疼痛して気力衰五味味ひなく起居
安ゝぞ手足有と雖ども自ら動働こと能ぞ終ホハ死亡ちるホ至りけり太子曰ふく
又問ふく此者一人のみ病あるや一切衆生も皆病あるや答て曰一切人民貴となく賤となく
嗜欲を省ず飲食を慎ざれぞ皆如斯病を發しけと答太子ぞく歎息して人人
間ゝホ一大難あり〻如斯の病者となるぞ富四天下を保貴ること轉輪王ゝとも何ぞ
特ホ足ん世人此大難を抱ホ何ぞ逸楽ホ荒ゝ飲食を貪ゆと深く怕ひ憂愁胸
ホ充て假山挺覧の御心消失烏陀夷を召て今日も亦心地煩ハしけれぞ是より還宮せ
べしと曰烏陀夷大ホ驚て是ハ如何なる御意ぞ先ホ老人を尋ぬ園林へ到りホず宮

輦を回されく母君の御心を安りホ今日亦病者を見ぬく御車を回しホ
不孝の罪のがれホハ君深密ホ在ぞ老人病者を見ホハざれぞ御身の汚
ら如く思召ども是ハ普く世ホ有ふ常の事と思召ぞ只假山御遊覧
あらく御心を慰ホ是大王の御孝行ゆゑと練る太子ハ浄居佛の為ホ
厭離の心信深く敢く遊楽を欲しホハざれど烏陀夷ゆ如く先ホ羊
途より回りく憍曇彌夫人の意ホ背た今亦羊途より回りて又大王の睿慮
ホ背ぞ実ホ不孝の子ゆく罪を謝しきん道なると思及ぶ心なるぞ御車引
きく典薬を召て病者ホ医薬を施し与へ假山へ至りホ烏將軍大ホ悦び羊
途ぞく出迎へく宮輦ホ隨遂し一亭二樓ぞホ御車を止く種々ホ饗應しけり
歌舞吹彈ハ以ぞ更なり百般千般の遊楽をなして太子を慰ちまるぞ太子ハ
弥増佳者ホ御心とまるぞ女楽美婦ホ目を付ホぞ咲散花を見て之紛花
落葉の無常を観じ飛泉流水を見ホ光陰の移ると猶是より速ろ

と申すうちにおゝ左右して日も稍西に傾ければ烏陀夷を召て還幸を命じ給ふ烏
将軍八王命を奉りて直ちに尚歩日も御車を留らんと種々練られと曾て承引
しなかりけり紬を拂て寡の御馬に召れ従者に前後を守せ還幸なり給ふに
浄居佛此時まゝ思ひ給ふに已に老人病者と化して太子の心を絨つ今亦死相を示
愈其道心を燈ずせんにあれど衆人に尺る事を得せしめず外更の科〻刑を加
へ無辜を戮せるに至りぬ不如太子烏陀夷二人のみ尺ると得他の者八尺ふこと
なくあんずに如斯思惟し神通を以て死者となり還幸の道路に横り伏その
躰呼吸已に断色枯悉く土色と変じ尺るもいぜれ形相なり然ども緒人の眼に八尺
えず太子と烏陀夷とのみ眼に遮りぬ太子馬を停て烏陀夷を顧みて是を何
者ぞと問ひ給ふ烏陀夷賢なる者なれば胸中に甚く已に老人と病者と有て我其然
所以を告太子の御心を煩はしまつれば此回只不知と申て答なきことと思ふに浄居
佛早く其心中を察し神通力を以て烏陀夷が心を放心せず不覚しく答をなさし

む是に依て太子の再び問ひ給ふ時烏陀夷我を忘て是死者ぞと答太子申給ふ問
ひて何なる死とかや答て曰それ死と謂ふ神去呼吸断く地水火風の四散五躰
腐爛せるに至りぬ人世に在て五欲を擅に銭財を貪り積聚して死知る無常
なるに已に刀風の為に形を解き死路に赴て父母親戚怨み惜ども其甲斐なく
只拂ふる草木の如く不日して朽果ぬなりと申太子安て亦曰く唯此人のみ然や一切
衆生も皆然ぞ烏陀夷尚神通に厲れ答て曰豈此人のみに限ん乎王侯貴族より
下民卑賤に至まで一人も死を免る者八ぬなしと太子申給ふ御身に冷汗を流し
て曰く世間已に如斯の死苦有て一瞬の間も安心なくして然に世人何ぞ大苦悩
を抱ぞ色食に愛着し放逸の行をのみ好やとして歎息し事止ず快さ
て月景城に帰り着給ふ憍曇彌夫人に太子假山に出遊し給ふ必ず旬日に滞留し御遊
有ぞと思召るに只半日にして還幸し給ふに心悦ぶに潜に烏陀夷を召て太
子假山に出遊し給ふや否やを問ひに烏陀夷隠さず能くに行幸の路上

病者あつく太子の御心を煩はしまつり已に還幸あらんと仰せを種々練進ずせ左右して
假山へ行幸なしまつり百般の游戯をなして慰進ずれども楽しみ休なく唯あらば
ぐちまくいと早く還幸を促しまつり已吏を得ざ御車を還しまつるに再び路上
に死者有て太子を愁しまつりいと言上を憍曇弥ぢろに詔ひ監毘尼苑御遊
の路に老者あつく車を還しまつり此同八大王の勅捉して路上に老人病者不浄
の者を在せざれと厳に觸させ詔ひに何度病者乃至死者を見ひ是外吏の怠
なりとて其旨王宮へ奏せる有れど浄飯王甚だ逆鱗あり外吏を悉く聽へ召せ
官人に命じて罪を糺させ詔ひに外吏ホロをそろく陳じる八下官ホ大王の勅命と
重人じ厳に老病不浄の者を排除ひに何国よりも来ざ忽然と病者出現し
ひね然ども何里の者とも知者なく其踪跡もなれども亦還幸の路に死者の在
し由八絶く見ざる者ひなど是八跡なく絶奏まくそひくもと怕ろ〳〵ゆくるに
官人其旨を奏達しまる浄飯王紜りて太子の供奉に参へ官人を召さく結

向しまつる外吏ぢ旨と答く維有て死者を見ずとも者に成れど浄飯王心地まどひ
ひ是八必ず天魔破旬の障碍なるべしく外吏ぢ罪を恕しまひ其後群臣と聚
會て宣く朕ぢ太子年已に十六才百般の技藝通達せざるとも事に成れども只歓
楽に心を傳ず且夕書巻をのみ翫び快きなる八自然先年相者ぢ考し如く王位を
踐ずに成欲せざ出家学道せん望なるぢ朕ぢ血脈茲に絶て慈悲賢王より連綿
に伝の繼種の天下他人の有となるべ卿等然ぢ高議して太子の道心を退け王
位を嗣ぢれ計ぢと宣旨ある諸臣勅命を奉りて冠を頂け各慮を回し
所に月光臣位階を進出臣愚意を回しに太子已に成長しまへども未ぢ宮妃
定まりまるぢ是に依て自然御心結ぢれ楽しみ遊ぢ出塵の御志に崩ずるに
ぢ然ども普く四天下に佳人を需く宮妃に備へ自然愛憐の御心生て
学道を止まり宝位に即ぢ〳〵と奏もるに諸卿も此議に卓論なり
と奇に思ひより浄飯王に命じ然ども悦びまひ然で諸國の王に命を傳て太子の

新宮ゝ備ゝ容貌端正ゝ婦女を擇よと勅掟あるゝより諸卿ゝ領掌し
列位王宮を退出しゝ

悉達太子娶耶愉陀羅女

斯く滿朝ゝ群臣王命を奉ゝ何卒天下第一ゝ美人を擇ゝ太子ゝ新宮ゝ備
睿感ゝあらんと我も〳〵と心を盡し普く諸國ゝ美女を求め都城へ召寄る其
數七百余人ゝ及る憍曇彌夫人其美女ゝ中ゝ殊ゝ勝れる者を百人擇出し
其百人ゝ中より又十人を撰出し十人ゝ中ゝ二人ゝ佳人をもゝ出し太子ゝ新宮ゝ
備る其一人を阿耶摩國王ゝ愛女瞿野女とゝ今一人を釋種ゝ親族犯杖
とゝ人ゝ女瞿陀弥女とゝ両女とも無隻ゝ美貌ゝ梨花ゝ如くゝ風姿
海棠ゝ咲出る容貌あり共ゝ智才勝れ婦女ゝ技藝学究とゝ人ゝ吏ゝ
ゝ淨飯王も憍曇弥ゝ太子ゝ道心を止めん者此両女ゝ限るとゝ最ゝ思ひ
ゝ太子ハ二女ゝ國色を見ゝ曾て心を動しゝ畳ハ左右ゝ侍らむへ

ども夜ハ敢て枕衾を倶ゝもせゝ廣野瞿陀彌ゝ二妃媚を竭し色戎術種を
心を竭して太子ゝ春情を誘ども更ゝ心を移しゝ二妃ハ余りゝ吏ゝ此太子
若男子ゝ在ハ不在ゝやとゝ疑る茲ゝ右梵士とゝ者淨飯王ゝ奏して曰臣
普く諸道を徑歷して太子ゝ新宮ゝ備る佳人を尋求ゝ迦夷國ゝ
一人ゝ王女を見ゝ容貌花ゝ如く肌膚玉ゝ如く欺く頻加ゝ如く技藝ゝ通じ賢才智慧天下ゝ隻ゝ大王聘禮を重く迎とり太子ゝ
新宮ゝ具ゝ必定宝冠愛ゝ出塵ゝ念を断ゝ淨飯王睿感
あり即ち右梵士を勅使として伽夷衛國王ゝ許へ到る聘礼を享し婚儀
を求ゝ彼國王敬ゝ勅使を結び拜伏して曰大國ゝ皇帝ゝ國ゝ募人ゝ
早ゝ小姐を乞ゝ白王太子ゝ灑掃ゝ備ゝ人ゝ宣旨國ゝ大幸何吏ゝ見ゝ過
ゝ侍ゝ小姐ゝ意を不知ゝ王命を統ゝ可否を定ゝ後勅答し
小時待せ給へとて客殿ゝ結び入官人を以ゝ重く饗應せ其身ハ後宮ゝ

入愛女耶輸陀羅女ヲ對ス。ケ阿陀國ノ淨飯王其太子ノ為ニ你ヲ娶ントスル知
汝肯ヒ乎ヤ否ヤト問耶輸陀羅女仰テ曰傳ヘ聞ク伽陀國王の太子降誕ノ
時三十四の奇特瑞應あり成長て天文地理等數ヘ百般の藝不学して通達
しあることを是ハ天竺ニ人の聖主なるべし速ニ婚儀を結ムヘしと又王ノ曰是まで隣
國ノ王各太子の為ニ汝を娶んと使者をさし越者都て八國ニ及ヒ汝悉く承引
せざるニ今遠く伽陀國王と婚儀を結ぶ恐くハ隣國ノ王怒て兵馬を發し
攻来ル。此難を奈何とせん耶輸陀羅女ノ曰是憂ルニ不足悉達太子を請ジ
隣國の王ニ觸ル。悉達太子と緒般ノ藝をくらべ勝ん人ニ小姐を娶ル
云せむ。八國ノ太子悉く聚リきたりて悉達太子と技藝を闘ハむ必定
八國ノ太子勝て餘ル。自恥く國ヘ回る。其上ニ伽陀國と親を結ん。敢
て恨を懷者いまし。とハ。我ル女統得く好とて即ち
客殿ニ到リ。右梵士ニ對面ス。右ノ一五二十を統て一遍を。右梵士ニ是何ト

安ンぬ。別を告ク本國ヘ立回リ淨飯王ニ得ル有ル顛末を回奏ス。此義
如何あらんと思ふ。先太子を召ク迦夷衛國王ノ云ル扨のむこを告ニ太
子何とう思召ん一議ニ及ヒ承引ス。是ニ依て淨飯王十萬ノ四兵を發し
て太子を傍護を。迦夷衛國ニ赴ク。此旨豫て聞ヘ彼國王遠く迎接
しく城中ヘ請ジ初て太子の相貌を見ルニ三十二相具足し光輝でうれハ大ニ
歡喜ス。耶輸陀羅女を呼出て太子を拜せむ。耶輸陀羅女一度太子ノ王貌
を見ルなりて眼瞬ぎ。太子の此女を見ル笑を造りむひ。把ル珊瑚ノ笏を女ニ
賜妃敬く是を受ル。妾ハ只君ノ德を慕ル。敢て宝を貪リ思ハ。
なる太子其幻を見ル婦德を感ジ。國王ハ城外ニ方四十里ノ鼓を構鐘と
鳴し鼓を拍ク國中ニ響ク。我ル小姐と婚を結ん欲する者ハ七日ノ
後此場ニ来ル藝術を闘せよ。技ノ勝たん者を女婿とせんと觸レ。隣
國ノ王傳ヘ聞ク各數萬ノ兵を率て太子を傍ル。迦夷衛國ノ都城ニ聚る者

悉達太子迦夷衛國ゟ
達婆太子と
馬術を
競ふ圖

都く八國。其勢數十萬人思ひくゐ屯を取く扣う。程なく其日ゐも成れむ
國王ハ耶輸陀羅女を牽て諸臣と俱ゐ高樓ゐ昇く其勝劣を望る。同
ゐ東の門を開うせく悉達太子羅穀錦繡の裝を飾り烏芝麻を始め
數多の近臣を從へ從容うて廓ゐ入ゐぬ。ほく西の門を開く私良國の皇子
達婆太子衣裝花麗を盡く紆多の臣下を從へ入来り。馬術を競んと欲
望り悉多太子是を諾むへ。官人頓く二領の駿馬を牽出て両太子ゐ与
茲ゐ於く東西奇く馬上ゐ跨り乗出くるゐ悉達太子手綱をゐ引く左右
前後ゐ乗回ゐ。其進退の疾こと電光のごく。ちと見とむる吏能ハざれ
達婆太子大ゐ慌鞍踏くく馬上より逆ゐ落ち。是ゐ依く東方の官人
鼓を拍く悉達太子の勝を報じ。達婆太子ハ赤面く退て出次ハ仙妻良國
の皇子欲光太子衆人を牽く場ゐ入筋力を競ん吏を望く自大盤石を採
く手球の如く弄うて中庭場中を回りるゐ一声高く叫び悉達太子の頭上

を臨ぐ投げ遣る。太子徐ゐ右の手ゐ以く受留天を望ぐ投上ゐ。盤石鳴響て
空裏ゐ昇り。霹靂の如く欲光太子ゐ頭上へ墮下る。欲光其勢ひゐ辟易し。身を
翻く狩の外へ逃退たり。其次ゐハ尸屋破利國の皇子静観太子場ゐ入算數
を問答せん吏を望く樹木藥草衆水滴數或ハ日月星辰の度數ゐ及び天門地理
八萬の異術ゐ至る迄是を問ゐ悉達太子一々是を答ん事溢くうて流水の如く
一言半句も滞りゐぬれ。静観及ずて引退く。其次ハ阿蓍耶尸國の堅牢太
子場ゐ入射藝を闘さん吏を望む。是ゐ依く官人三百歩ゐ鉄鼓を堅く的とし
其數十鼓なり。堅牢先弓を彈級く是を射るゐ五の鉄鼓を射貫くり。其時悉
達太子徐ゐ立ち出ゐ弓を執く絃彈し。ゐ弓甚ぐ弱くれて五弓まぐ曳折
むひ別ゐ強弓を需ゐ。國王宝藏より黄金の弓を取出せ太子ゐ授与して曰
此宝弓古より納貯といへども無隻の強弓なれど敢て用る者なし。太子試ゐ引へ
とやされ多まぐ即ち挽く弦彈し。是よく丸が心ゐ合りく。鉄箭を採て弓ゐ番ハ

満月の如く弩をはりて矢を放つに其羽音して的中し十戟を悉く射貫き是
を見て堅立太子其及ぎざる代嘶閑口して引退く其余小國の太子書画管絃の
諸藝を競ふ一人も悉達太子に勝る者なれば各慚愧して従軍を引其國々へ
皆帰りぬ。迦夷衛國王大に悦び太子を大殿に請じて酒宴を催して重く食饗
し婚儀を約して五萬の軍馬を以て立迦陀國へ送りなす。浄飯王八太子八國の
皇子と技術を闘ハし婚姻を約して回ひりと告ひく歓喜に勝ひざる太子如斯諸
皇子と争て新宮を娶ハ必ず其意に合ひ難き出塵の心自然止ざりとて珍宝
綺帛數を盡く聘礼を享し。迦夷衛國に勅使を立て車千乗を以て耶輸陀羅女
を迎ひ月景城の裡に新宮を造営し博士に命て吉日良辰を卜せ亀鶴の婚姻
を取結せひり是に依て浄飯王憍曇弥夫人年未憂愁の昔を安んじひ満
朝の月卿雲客そこに民間の未まだも皆萬歳を唱へ悦勇まざるの者なし

釋迦御一代圖巻之二畢

本文庫

昭和42年12月20日寄贈
和田大作氏